

たたら炉

ここに再現されたたたら炉は、20 世紀初頭の製錬の様子を示している。模型の中央には長方形の土炉があり、左右のふいごは竹筒でつながれている。

このレプリカは、数日にわたる製錬プロセスの後期段階を描いている。多孔質の鉄と鋼の塊（ケラ）が形成され、炉の底にある光沢のある灰色の塊がそれを表している。当初は厚かった粘土壁はほとんど溶け出し、溶けた鉄の中の不純物と反応して、"スラグ" と呼ばれる廃棄物を形成している。製錬の過程で、スラグは炉底の穴からゆっくりとにじみ出てくるが、これは模型の反対側から見るができる。

人力で動くふいごとは対照的に、このレプリカのふいごは、現在日刀保たたらで使われているものとよく似ている。機械で動くふいごの可動部分は別の建物にあり、空気はパイプを通して高殿の作業場に送られる。

製錬が成功するかどうかは、炉の中で特定の化学反応を起こすかどうかにかかっており、そのためにはある種の粘土と、炎に供給するための安定した酸素の流れが必要だった。これらの要素の重要性は、鉄工職人の間でよく使われる格言に表れている：「第一に良い粘土。第二に、良い空気。第三に、良い村下」。

(炉の地下構造は階段下の看板に書かれている)